

時代小説を書いている。途中で投げ出すことが多かったのに、今回は間を置かず、続けて三作書いて、何れも完結させた。

「小説の基本は時代物でも現代物でも何ら、かわりはない」と先達は言うかもしれない。確かに、基本はそうであってもテクニクは違う。

歴史の流れを捉え、主題に成りそうなところを切り取って書くには、書き手が時代を充分に知っていることが不可欠である。歴史の勉強をやり直さなければならぬ。八十歳が目の私に、その根気はない。

先日、派手に転んで、頭の血を抜く手術をしたのだが拙かった。資料を読んでいると、先に読んだ事案が霧散する、というより、忘れてしまう。仕方なく、もう一度読み直す。この繰り返しをしているとイライラするし、腹も立つ。

しかし、奥の手が二つある。

一つ目は、登場人物を当代一の役者に差し替えて、演じてもらう。菊之助、仁左衛門、団十郎等々。騒動の渦中にある猿之助に中車も然りである。女優は芸達者な寺島しのぶ、奈良岡朋子、なんでもござれだ。私は狂言作者・鶴屋南北に弟子入りした気分で、傍らの浮世絵や絵草紙を見ながら。芝居好きな旦那衆に語りかけるが如くに書く。

二つ目は描写の工夫に迷った時に「ヨシ……あれを真似しちゃおう」と過去に読んだ本を思い出して傍らに置く。

私の読書歴は、新刊書を買う経済的余力がなかったこともあり、図書館での乱読であった。よく使わせてもらうのは「高野聖」の魔性。「レ・ミゼラブル」の正義と逃走。「トム・ソーヤーの冒険」の虚実だったりする。書き手がこの手を使うのは邪道かもしれないが、利用価値は多いにある。転勤族の妻として図書館に籠った日々が役立つている。夫に感謝している。

小説を書く楽しみを、僅かでも味わってしまった私は、書くことは止められない。

書く楽しみは、読んでもらう楽しみでもある。もう暫くの間「時代物」を書いてみる。